



# 館長だより

山形県産業科学館

令和8年1月4日(日)

発行 館長 加藤智一

## 午年の象徴性 — 速度・情熱・転換の年

新年あけましておめでとうございます。年頭にあたり、ごあいさつ申し上げます。さて今年は「午年」。十二支の「午」は、単に馬を表すだけではありません。古代中国の十干十二(じっかんじゅうにし)支体系では、午は一年の中で太陽がもっとも高く昇る「正午」と結びつき、陽気が極まる象徴とされました。つまり、「午年」は「勢いが頂点に達し、そこから転じていく節目の年」とも解釈できるわけです。馬という動物自体も、古来よりスピード・移動・突破力の象徴でした。日本でも「駿馬」は吉兆の象徴であり、神馬は神の乗り物として神社に奉納されてきました。特に東北地方では、馬は農耕・運搬の中心であり、生活と信仰の両面で深く結びついています。「土地の記憶」や「技術と文化の交差点」という視点から見ても、馬は地域社会の発展を支えた重要な存在でした。

ところでみなさんは、こんな相場格言をご存じでしょうか。「辰巳天井、午尻下がり」と申しまして、辰年・巳年は相場が天井をつけやすく、午年は尻すぼみになりやすいという経験則?を示したもので。もちろん統計学的な話ではありません。干支と相場を結びつける発想そのものが、古来の自然観や循環思想を反映しています。「午」は陽の極みであり、極まったものは必ず転じるという陰陽思想が、相場格言にも息づいているわけです。ただし、「午年」は「尻下がり=悪い」ではなく、「過熱したものが落ち着き、次のサイクルに向けて地固めが進む年」とも読みますので、文化史的に見ても、「午」は「転換点」を象徴する干支なのでしょう。

また、別の見方からすると、十二支には五行が割り当てられており、「午」は「火」、「火」のエネルギーが満ちる年でもあります。「火」は文明の象徴であり、創造と破壊の両面を持つエネルギーです。「火」は光をもたらし、技術を発展させます。しかし、燃え尽きれば灰となり、再生の土台ともなります。この二面性が、「午年」の「転換」というイメージをさらに強めているとも言えるでしょう。

近年、世界的にみればAIや宇宙、環境関連産業、半導体関連産業が注目を集めているやに思えますが、果たして、今年の山形県では、どんな産業が世間の注目を集め、「転換」と言えるような発展を遂げるの

でしょうか。山形県産業科学館は、霞城セントラル25年の歴史と共に歩んでまいりました。開館当初と比べれば、大きく変わったところもありますが、全く変わっていないものもあります。それは、来館してくださる方々の想いであり、時代の変化に合わせたニーズの表れでもあります。私たちはこれからも、変わりゆく家族の形や、地域の実情を踏まえた運営努力を怠らず、未来を担う子ども達に思いを寄せ、県民の皆様の力強い励ましとご協力を支えにしながら、山形県の産業技術や科学技術に興味関心を持ってもらえるような施設として、その役割を果たしていきたいと考えております。



👉 「今年は午年。年賀状の挿絵を作ってもらいたい。おめでたい七福神や山形の風景を浮世絵風に、謹賀新年の文字も入れて考えてください。」とAIにお願いしたらこのように作ってくれました。富士山のどこが山形らしいのかは、分かりかねます。